

『和訓三部経』と聖徳太子

井上 勝志

はじめに

その実情はともかく、近松の「添削」ということを考える時、「添削近松門左衛門」と内題下にある『善光寺御堂供養』か加賀掾の『和訓三部経』を下敷きにしているという事実からすれば、『和訓三部経』について確認をしておくことは重要な階梯の一つであろうと思う。事実、『和訓三部経』には刊記に近松門左衛門の名前のある正本（横山正氏蔵）も存在する。他に大阪大学国文学研究室蔵本が知られ、二本とも同板の由であるか（注（1）解題）、後者は宇治座形式であり、前者も中身（本文）は宇治座形式であり乍ら、刊記には竹本筑後掾と近松の名前が示されていることになる。もちろん、竹本座での上演などはなかったであろうし、裏表紙見返しにある刊記なので、所蔵者などによる作為と考えられるか、このような正本が作り出されるということは、「添削近松門左衛門」とある『善光寺御堂供養』との関わりが、その背景にあるように思われる。

本稿では、『和訓三部経』における当て込み、そのことから想定される上演年代を中心に、本作の意義付け、加賀掾と大坂との関わりについて若干述べてみたい。

一、橘寺での講経・上宮院

『和訓三部経』下巻には次のような場面がある。⁽³⁾

扱仏前に高座をかざり。浄土三部経御えんぜつ有ければ。うばそくうはいびくひくに。こそつて是をちやうもんしねふつの行にぞ入にける。

あるいは、「猶有かたきは善光か母以前のうしのおにすかり。せつなに来るは是そ此牛に引れて善光寺。太子は老母を御座近く召れ。様々説法御けうけ有。」というような場面もある。⁽⁴⁾

信濃国に下った聖徳太子が浄土三部経を演説するという、この場面が本作において眼目であったであろうことは、「和訓三部経」という題名の抛るところであることから窺える。⁽⁵⁾

浄土三部経ではないが、『勝鬘経』『法華経』を聖徳太子が講説するということは、『日本書紀』推古天皇十四年条にも見えている。

秋七月に、天皇、皇太子を請せて、勝鬘経を講ぜしめたまふ。⁽⁶⁾
三日に説き竟へつ。

是の歳に、皇太子、亦法華経を岡本宮に講じたまふ。天皇、大きに喜びて、播磨国の水田百町を皇太子に施りたまふ。因りて斑鳩寺に納れたまふ。（『日本古典文学全集3』『日本書紀②』）

『聖徳太子伝記』。三弥井書店) 卷八にも「同年の秋七月の比、勝鬘経御講讃の會場をたつめねはいまの大和國橘寺の大講堂なり。」と見えており、講経の場を橘寺だとしている。『橘寺縁起』(『大日本仏教全書』第118冊)にも「佛頭山上宮王院菩提寺は世に橘寺と云へり。推古天皇光元二年^{丙寅}皇居を以て寺を立給ふ。其故は帝聖徳太子を請したまひ説法を講し給ふ。：(中略)：勝鬘経を講し給ふ事三日三夜。」と、聖徳太子による『勝鬘経』講説を推古十四年(丙寅)、橘寺でのこととする。

この講経については、『聖徳太子伝』(伝承文学資料集成 第一輯『聖徳太子伝記』。三弥井書店) 卷八にも「同年の秋七月の比、勝鬘経御講讃の會場をたつめねはいまの大和國橘寺の大講堂なり。」と見えており、講経の場を橘寺だとしている。『橘寺縁起』(『大日本仏教全書』第118冊)にも「佛頭山上宮王院菩提寺は世に橘寺と云へり。推古天皇光元二年^{丙寅}皇居を以て寺を立給ふ。其故は帝聖徳太子を請したまひ説法を講し給ふ。：(中略)：勝鬘経を講し給ふ事三日三夜。」と、聖徳太子による『勝鬘経』講説を推古十四年(丙寅)、橘寺でのこととする。

しかし、この年時については異説もある。『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』(『大日本仏教全書』第117冊)では、「戊午年四月十五日。請上宮聖徳法王。令講法華勝鬘等經。」とあり、同様に『上宮聖徳法王帝説』(『大日本仏教全書』第112冊)でも「戊午年四月十五日。少治田天皇請上宮王。令講勝鬘経。」と、戊午年つまり推古六年四月十五日のこととする。

延宝九年五月序文の『和州旧跡幽考』卷十五には、

▲勝鬘経講舎の定日まち／＼のさた侍る中に年暦の異をあらはす平氏傳には推古天皇十四年と云々法皇帝記には同御宇六年と云々しかれども平氏傳證たるべきのよし玉林抄にあり(『大和名所記』和州旧跡幽考)。臨川書店)

とあり、両説のうち推古十四年説の方に軍配が上がりそうであるが、一方で推古六年説もあったこと、異説が併記される余地があったことに注意しておきたい。

さらに、もう一点確認しておきたい。橘寺は別名菩提寺とも言い、

仏頭山(または、仏頂山)上宮院とも言うが、聖徳太子との関わりについては、種々の伝承があった。當寺者推古天皇在位之奮都。濫觴遠隔。上宮太子降誕之靈地。(『橘寺阿弥陀堂供養』。『大日本仏教全書』第118冊)池邊天皇。其太子聖徳王。甚愛念之。令住宮南上大殿。故號上宮王也。(『上宮聖徳法王帝説』)上宮院は上宮太子の御建立より院号となせり(『和州旧跡幽考』卷十五)

聖徳太子生誕の地であるかどうかの史的検証は措くとして、また、後に橘寺となる宮殿の上宮に住まいしたから上宮王と号したのか、上宮太子が建立したから上宮院なのか、という卵が先か、鶏が先かのようないふことも、ここでは問題にしない。右に見られるような、橘寺と、聖徳太子の上宮太子という称号との繋がりに着目したい。と言うのは、『和訓三部経』において、聖徳太子を指して、「聖徳太子」「上宮太子」、および「太子」と呼ぶが、その現れ方が気になるからである。

最も多く見られるのは「太子」で、『古浄瑠璃正本集 加賀掾編』第三の頁・上下・行で示すと、220・下14、17、221・上7、13、下15、222・上7、224・上2、16、下4、225・上4、14であるが、「聖徳太子」は四箇所(220・下12、223・下5、12、16)、「上宮太子」は二箇所(224・上7、下9)である。二二三頁以前と二三四頁以後とで「聖徳」と「上宮」とが使い分けられているかのようであり、それは、都を舞台とする前半と、信濃国へ下向して三部経を演説する場面のある後半とに照応している。

つまり、信濃国での浄土三部経の演説としてはいるが、そのような

伝承は今のところ確認できておらず、この場面は、それ以前の「聖徳太子」という呼び方を「上宮太子」というように違い、統一していることもあって、橘寺における太子の『勝鬘經』講説の姿を写しているように思える。そして、それは何の理由もなく仕組まれたとは考えにくい。題名の由来ともなっている場面であってみれば、なおさらである。

ここで、先の年時の揺れを思い起こすと、推古六年は西暦で五九八年、推古十四年は六〇六年である。それから一一〇〇年後に当たるのか、元禄十一（一六九八）年、宝永三（一七〇六）年である。この年時は本作の上演と無関係であろうか。

ちなみに、橘寺と善光寺如来との関わりも浅くない。『実隆公記』永正五年五月十一日条に、次のような記事を見るからである。文明九年六月二十四日、善光寺本堂が炎上した時、善光寺仏が焼失してしまったか、瑞夢を蒙り、文亀二年四月八日、堺で新調した、その「根本善光寺前立新佛」についての「信州沙門戒順」からの「謹言上」書の写しである（『実隆公記』巻五、太洋社）。

善光寺新佛觀覽事頻望申之、可爲如何哉之由被仰之、旨趣見目安、仍寫留之、

信州沙門戒順謹言上

：（中略）：本佛如来任信州御下向之例、不違其道路大和國橘寺奉遷之、其後南都奉入之、只今觀山坂本奉逗留之處也、欽明天皇御宇善光寺如来奉入禁中有御觀覽云々、任往古例御觀覽候之條、預啓達者可畏入存旨、謹言上如件、

永正五年五月

新仏を宮中で天皇の觀覽に入りたいとの申し入れてあるか（同日記に拠ると、同月二十日、善光寺仏は禁中に入った）、それに先立って、堺から、古例により、まず橘寺へと移されている。

二、転生と対立の齟齬

本作の構成について、平田澄子氏に次のような指摘がある（『歌舞伎・浄瑠璃と仏教説話』。「國文學—解釈と教材の研究」平成16年4月号）。

上巻「天竺月蓋長者」、中巻「震旦聖明王」、下巻「日本本田善光」の三段構成、『月蓋長者』五段の改作であるが、仏教をめぐる、月蓋対提婆達多、聖明王対正活太子、聖徳太子対守屋の対立が順次各段に配されている。そのため、善光寺縁起の中心である本田善光の転生譚を語る下巻では、善光寺説話と重なる個所が少なく、『善光寺堂供養』との関係も希薄である。

本書には、所謂内題はなく、三巻構成の冒頭にそれぞれ、平田氏が記されているような見出しがあり、三国伝来仏と伝えられる善光寺如来の由来を語るに相応しい構成となっている。ここでは、天竺から震旦へ、さらに日本へ、という転生か白魂と赤魂によって示される。

長者のしかいより。白色の玉あらはれひんかしに飛行は。だいはがしかいの内よりはあけ成玉のくるめき出。付まとひゆく玉のを

（上巻）

さいるきにてもつしたるくはつかいだいはかしくびやくのこんはく。中有にたゞよひくるく／＼とこくうをめぐり^三へ廻り来てだいはかしくこんくはうごうのふところにとびいれば。くはつかいかひやくこんはすいたい夫人のふところに。入（中巻）

（中略）本傳云文任信州縣下民之俗、不遵其道路大市國成
幸者遷之、其後南都奉入之、只今觀山坂本蓋逗留之處也、欽明
天皇御宇、善光寺如來奉入禁中有御觀覽云々、任在古例御觀覽候
之條、預啓達者可畏人存旨、謹言上如件、

聖明王のみたましる。かいしやうにうかみ出仏の御あとしたひ日本のかたへとびゆけば。正活のたましるもおなじくまけじとおひ廻り。中有にかゝつて出生の時節のえんをぞ待たりける。(中巻)
こゝに生れかしこに死す聖明王の白魂中有をぎやうれきし。此女房のたいないに廻り入こそ^{三重}へあやしけれ。(下巻)
ほんなふそくぼだいの法位に住せず。此ぜんごんにうばゝれし善悪しやべつのびやつけんに。あくま忽たよりをえ中有にまよふ正活のしやくこん。守屋の臣が一心に入かはるこそ^{三重}へうたてけれ。

この「しやくびやくのこんはく」が入ることによる転生の場面は、何れも三重の節付がなされており、からくりを伴った見せ場で、観客に印象づけられたと思われるが、その転生によれば、天竺における「月蓋長者対提婆達多」の対立を承けて、それぞれの魂魄が飛び入った、震旦百済国の大王正繁王の後「すいたい夫人」と「せんげん皇后」から誕生した「聖明王対正活太子」、さらに日本においては「本田善光対守屋」とならねばならない筈である。

しかし、實際は、下巻における対立は「聖徳太子対守屋」が中心となっている。下巻冒頭には、「本田のおんど、云まづしきぎよじん」夫婦の間に善光が誕生する場面も置かれるが、すぐに都・宮中に場面は移り、釈尊涅槃の尊像の献上、守屋の悪心、如来の出現と、聖徳太子と守屋の対立を描く場面が続き、次いで信濃国に舞台を移し、太子による浄土三部経の演説、善光寺伽藍の造立で幕となる。「しやくびやくのこんはく」による転生と対応しないのである。善光寺縁起において聖徳太子についての記述がそれなりになされるのは当然なのだが、

たい。

三、四天王寺六時堂薬師仏開帳

本作は、『月界長者』のように「こゝに、じちいき、しなのゝ國、川なかしまに、立給ふ、ぜんくわうじの、御ほそのの、ゑんぎを、くわしく、たづね奉る」⁽⁷⁾などと語り始めることこそしないか、「今日本しなのゝ國善光寺にみますなる。しやうじんの如来とは此御仏の御事也。」「善光寺の御本尊三國うえんのはじめ」⁽⁸⁾（上巻）、「是善光寺のあみだ仏太唐さいどの大えんぎ」（中巻）などとあり、信濃国善光寺の縁起譚となっている。

近世を通じてもっとも流布した善光寺の縁起である元禄五年版『善光寺縁起』⁽⁸⁾に拠ると、本田善光の嫡子善佐が頓死し、地獄で女帝皇極天皇と会い、身替りになろうと申し出たことによって、蘇生した後、善佐は信濃国、善光は甲斐国を頂戴し、善光寺を建立した、ということになっている。この部分は、善光寺が女性との深いつながりを持つ寺院であることも関連し、女人救済譚として重要な場面・趣向であったと思われる、吉原浩人氏は次のように述べられる（皇極天皇の墮地獄譚——『善光寺縁起』——。「国文学 解釈と鑑賞」第55巻8号）。

この本田善佐と皇極女帝の墮地獄譚は、貴賤上下・男女・罪障の多寡を問わない善光寺如来の救済の力と霊験の威力を改めて認識させるためのものであり、かつ善光寺大伽藍建立の必然性と、王権との深いかかわりを広宣するために、善光寺縁起にとって必要不可欠のものであったと、結論づけられる。

『月界長者』『善光寺堂供養』といった先行浄瑠璃においても、こ

の場面・趣向は、省略されることなく、踏襲されている。

しかし、本作においては、皇極天皇はおろか、善佐すら登場しない。女人救済というテーマは、本作においても疎かにされているわけではなく、月蓋長者の下の水仕連理（上巻）、長者の一人娘如是姫（中巻）、さらには、「牛に引れて善光寺」という諺起源譚として語られる善光の老母（下巻）の救済が各巻に仕込まれている。そんな中、女人救済という観点からすれば、衝撃的とも言え、また、善光寺造立にも関わる皇極天皇墮地獄譚を敢えて省いている。善光寺造立に皇極天皇が関わるといふ、言わば「常識」に逆らって、本作では、その点をどのように描いているのか。

上宮太子は。しなのゝ国にときよあつてねはんざうをみづしにうつし。えんぶだこんのそんなうはうすの上にあんちらる。信州うするといへる名目此ちなみによるとかや。：（中略）：太子善光にの給ふは。しなのふどきをかんかふれば。あきつすにたぐへ土の高き事四十丈。中にもみつちの郡はさいじやうたかきれいじやうなれば。がらんざうりうなすべしと御もんだうもをはらぬに。忝くも弥陀如来御帳の内よりしゅつけんあり。：（中略）：時に霊木えだをたれ自然造作の大がらん。如来せんかう成けるはふしき。にも又三へ有かたし

善光寺は聖徳太子の威徳によって自然造作されたとするのである。

これは、本作の思いつきによる全くの作り事ではないようで、『聖徳太子伝』巻十の「聖徳太子御建立四十六ヶ所寺院」の二番目に「阿弥陀院 信濃国後名^{（のちな）}善光寺^{（せんくわうじ）}一本名云百濟寺^{（せんくわうじ）}也」とあり、また、『天王寺誌』（清文堂史料叢書 第66刊『四天王寺史料』）の書き込みには「善光

「月界長者」『善光寺堂供養』といふ先行浄瑠璃においても、この

寺旧址 在于石鳥居之西南隅四十歩許田間、土俗相伝謂、信州阿弥陀院旧在此地、後移彼、改名善光寺、又名百濟寺」とある。つまり、聖徳太子善光寺造立という発想が生まれる下地はあったのであるが、敢えて皇極天皇ではなく、聖徳太子を取り上げる意図は何であったのか。

ここで、京阪の歌舞伎界に目を転じると、狂言本は未見乍ら、『役者万年暦』（元禄十三年三月、八文字屋刊）に拠ると、元禄十三年、京四条河原の山下半左衛門座（名代亀屋久米之丞）では「替りけいせいでは「替り女朝敵三国伝来記」が上演された。前者は外題の左右に「天わうじ」「やくしかいちゃう」とあり、後者は外題左右には「付り聖徳太子十三月にて御誕生ゆらひ」「并二玉よの姫日の出の春御所車は千里一羽」、さらに「下 いさめ奉るれいじんのまひ」六じたうやくしかいね」とある。これらは、『四天王寺名跡集』（『大日本仏教全書』第118冊）に、

六時堂

…（中略）…元禄十三庚申春。本尊薬師仏開帳シテ諸人令拜之。開祖伝教大師以来始尊像ヲ開ケリ。

とある、四天王寺六時堂の薬師仏開帳を当て込んだ上演である。何れも詳細は不明であるが、「女朝敵三国伝来記」の方は、後に善光寺如来として安置される三国伝来仏の由来を匂わせる外題であり、この薬師仏開帳を機に善光寺物を上演するということが突飛な発想ではなかったことを裏付けるのではなからうか。つまり、善光寺の縁起を語る『（和訓三部経）』における聖徳太子譚拡大の理由は、この開帳の当て込みにあるのではないかと思うのである。

「月界長者」『善光寺堂供養』といふ先行浄瑠璃においても、この

この開帳が具体的にいつ行なわれたのか、「元禄十三庚申春」とあるのみで、不明であるが、「けいせい」『女朝敵三国伝来記』の上演を伝える『役者万年暦』の刊行された三月を下限として、ともに二の替り狂言であること、「女朝敵三国伝来記」に「下 いさめ奉るれいじんのまひ」とあることから、六時堂において伶人による舞楽も奏される涅槃会が執り行われる二月十五日あたりの可能性は考えられないだろうか。憶測に陥るかもしれないが、『（和訓三部経）』における涅槃像の取り上げ方とも関わるように思えるからである。

『善光寺縁起』などでは、本田善光は信濃国伊那郡麻績の里の土民とするのであるが（『月界長者』では信濃国水内郡芋井郷の民、『善光寺堂供養』では信濃国川中島の民）、『（和訓三部経）』では、善光誕生の様子を次のように語る。

越後の国古田の浦に本田のおんど、云まづしきぎよじん有けるが。

…（中略）…大き成はまぐりをこちはなせばこはいかに。かいの中より光明かゝやき。わうごんのねはんざうけんじ給ふぞ有がたき。

…（中略）…越後の国古田のはま本田のおんど参内し。善光が生し有様ねはん仏の御きずい。つまびらかに奏聞し。

善光を出産したおんどの女房が息切れし、水を欲しがすが、器がないためその殻で掬おうと蛤を開くと、中から涅槃像が出現したとし、その場所を「越後の国古田」とする。善光の出生を語ること自身、『善光寺縁起』などには見えないのであるが、その地を「越後の国古田」とするのは、次の伝承を踏まえたのであろう。

○釈迦堂にあり本尊涅槃の釈迦如来なり天延年中越後国古多が濱よ

り出現の像なり（『善光寺道名所図会』巻之三。版本地誌大系15『善光寺道名所図会』）

釈迦の涅槃像は、出開帳の際、善光・弥生・善佐の三卿像とともに善光寺如来に同行するため、馴染みはあったのであろうか、善光の誕生に絡めて涅槃像の由来を殊更に語ること、また、前章で見た、聖徳太子の誕生時を思わせるかの如き正明太子誕生に際しても、この涅槃像出現を描くことも意味無しとは言えないように思うのである。

六時堂の薬師仏開帳は伝教大師以来初めてのそれであったと言うか、元禄十三年という時期に行なわれた理由はつきとめられていない。同年春には、庚申堂の尊像開帳も行なわれたと『四天王寺名跡集』は伝えるか、こちらは、「文武天皇御宇大寶元年正月七日」、日本で最初に庚申か降臨して、「二千年二及へり。因ッテ開帳尊像ヲ拜マシム。」と、千年という節目での開帳であったと言う。

四天王寺の開帳と、橘寺での講経後、一一〇〇年とは直接関係はないのかもしれない。か、『和訓三部経』は、開帳に触発され、折からの一一〇〇年記念をも取り込んでの発案、上演で、それは元禄十三年春（二月か）であった可能性を提案してみたい。

元禄七年六月二十四日より八月まで洛陽東山真如堂で、九月十一日より大坂四天王寺で善光寺如来の開帳があり、京阪ではそれを当て込んでの歌舞伎上演を見た。従来、本作もその開帳の当て込みにより、同年上演か、とされている（信多純一氏「宇治加賀掾年譜」、『加賀掾段物集』、古典文庫）。その見解に対する異議、反論は聞かないが、平田澄子氏は、元禄七年の歌舞伎での当て込み上演を挙げた上で「本作もこれらと並行して興行されたと考えてよいのであろう。」（前掲論文）、

「本作も前述の開帳と関係があるものと思われるか確証は得られない。」（注（1）解題）と慎重であるし、和田修氏は「元禄六年と推定される『和訓三部経』も三巻構成たか、「月界長者」にもとづいて如来像の天竺、震旦、日本の三国伝来を描くという特別な趣向もあり、年代もさらに考慮すべき点があるようである。」（「元禄期の宇治座と竹本座」、『演劇研究会 会報』第21号）と、疑義を呈される。和田氏は宇治座作品における三巻構成の定着について述へられる中での発言であるか、「宇治座で三巻構成が定着するのは、元禄十年以降としてよいだろう。」と結論されていて、右の提案と抵触はしない。

むすび

本作の中巻双六の場面は『楊貴妃物語』（『古浄瑠璃正本集』第三、六番）における楊貴妃と虞子君とのそれを想起させるし、こまんとせんけん皇后によるにせ虎の趣向はいかにも歌舞伎的に感じられ、平田澄子氏が「特に中巻は『月界長者』以外の典拠の存在か想像される。」と述へられる（注（1）解題）ように、（歌舞伎の）典拠がありそうに思われる。それらとの関わりで捉えねばならない側面も本作にはあるのかもしれない。また、本作の上演を元禄十三年春とした場合、前年十月の万太夫座における暇乞狂言で、「作者近松門左衛門」とある『あみだか池新寺町』からの影響か指摘できないことも、近松の本作への関わりとも併せて、気になるところではある。先学が慎重に発言を控えられた所以であろうと想像する。

しかし乍ら、本作下巻で善光寺説話と重なる箇所が少ないという前記平田氏の指摘は、とりもなおさず聖徳太子譚の拡大ということであ

り、このことの意味するところは、聖徳太子の橘寺での講経後一一〇〇年、大坂四天王寺での開帳を当て込んだ本作の元禄十三年春（二月か）上演ではなからうか、と本稿では考えてみた。それは、従来認定されていた推定上演年代に対する単なる異論提示ではない。

加賀掾は、かつてのワキ語りであり、その実力を見抜いていた竹本義太夫「出世」に絡んでのこととは言え、貞享二年、西鶴をも巻き込んだ義太夫との競演という道頓堀振興に協力した。

それからちょうど二十年後の宝永二年、加賀掾（宇治座）は『雁金文七（評判のあざうし）』を引つ提げて、大坂堀江で出興行を行なった（信多純一氏『人形浄瑠璃舞台史』、八木書店）。それは、大坂での雁金文七ら五人男の処刑を正面に据えたものであるが、正本の表紙見返しには、難波堀江の濫觴を語った詞章が掲げられる。これは、所謂「本文」ではないが、「本文」とも深く関わる序開きで語られたものと考えられる。加賀掾たちが語っている付舞台の手前に土間も描かれた口絵が右の詞章の下部にある。ここには、
けんくはす
「かみ

なり庄九郎むり云」『けんくはの後文七男だての中間へ入』との説明があり、庄九郎・文七も描かれるが、その衣装は挿絵中の庄九郎・文七のそれと一致する。これらは、本文（第二）に見える「いつぞやほりゑのしばいす上り聞に行し折からも。大ぜいの其中にてかやうのむりを云かけられ」や、「近所のこくるかぢ」であった千右衛門に「おれももとは色ゆへにしたがい付あふ事なれば。引合て中よくせん中間入してゆつくりと。くるは通ひせよと云」われたとの文七の台詞とも合致する。口絵中には、「まんぢううり」の姿や、「木戸の物来る」という説明もあるように、庄九郎も、文七も、人形ではなく、人間

（役者）が演じているのであろう。「す上り」とあることから、そう考えてよいであろう。つまり、付舞台で加賀掾たちが難波堀江の濫觴を語っている時、それを聞きに来た文七（役）が、「大ぜいの其中にて」庄九郎（役）に無理を言われ、喧嘩となり、駆けつけた木戸の者が仲裁に入り、その後、文七は庄九郎たちの仲間となったという趣向であり、「本文」への導入、つまりは序開きに他ならないであろう。

この序開きで難波堀江の濫觴が語られるのは、京八坂庚申堂での善光寺如来の開帳を当て込んでいたためで、その上演は同年の二月であったと考えられるが、京での開帳を当て込み乍ら、大坂堀江での出興行を行なうのは整合性がないようにも思われるかもしれない。宝永二年の二月、それが大坂の興行界にとってどういう時期であったのか、筑後掾の引退決意に伴う竹本座存続問題の渦中にあったのではないかとも思われる。仮にそうだとすれば、その危機に際して、大坂側からの要請があり、それに応えた結果が加賀掾の堀江出興行であったのかもしれない。そのような背景があったのかどうか、その考察は慎重に、是非なされねばならないと考えるが、加賀掾の堀江出興行は突飛なものではなく、成るべくして成った、自然な成り行きの興行であった、と感得するためには、本稿での提案——『和訓三部経』が大坂四天王寺薬師仏開帳を当て込んで、四天王寺ゆかりの聖徳太子を大きく取り上げていると見ることは有効ではなからうか。角太夫、あるいは出羽座のように何度も何度も繰返し上演を見たわけではないが、善光寺、四天王寺などに関わる聖徳太子を通しての、加賀掾（宇治座）の大坂への視線が感じられるからである。

注

- (1) 『古浄瑠璃正本集 加賀掾編』第三解題(平田澄子氏)。
- (2) 拙稿「貞享初期の道頓堀―義太夫正本の形式・刊行から―」(『近松研究所紀要』第14号) 参照。
- (3) 引用は、『古浄瑠璃正本集 加賀掾編』第三の本文に拠るか、節付けは原則として省略する。以下同じ。
- (4) この他にも「後世をたすけえさんと。仏前に御手を合御念仏有ければ一会のくん衆高声に皆念仏をそとなへける。」「人間はいふにたらず天龍八ふ人と非人はつと礼して念仏すれば。数万のとうみやう龍灯天灯シ光かゝやく善光寺。法灯今にたいてんなく」と太子、衆生か念仏を唱える場面も描かれる。
- (5) 「和訓三部経」というのは、内題・外題ではなく、加賀掾の段物集『紫竹集』の目録題からの仮題である。また、その読みについて、平田澄子氏は「正本板外丁付けは「ひら一」「ひら二」とあり、本書は『ひらかな三部経』と読むか。」「(歌舞伎・浄瑠璃と仏教説話)。「國文學―解釈と教材の研究―」平成16年4月号」という見解を示されているが、首肯すべきであろう。
- (6) ちなみに、『善光寺縁起』第三にも同様の伝承を載せるが、「二才にならせ給ふまでに左の御手を握給ひける」と、握っていたのは左手となっている。近松の『用明天王職人鑑』でも、本文では左手説を採るが、挿絵では右手を開いている。
- (7) 『古浄瑠璃正本集』に拠る。ちなみに、『善光寺堂供養』でも「しなのゝ国ぜんくわうじにたゝせ給ふ、ゑんぶだんごんの御ほとけのゑんきをたつね奉るに。」とある。それぞれの語り収めは

次のようにある。

- くにゝもなれば、川なかしまにをいて、いそき、みたうをこんりうし、によらひをうつしたてまつる、いまの、きみやうさんせんくわうし、これなり(『月界長者』)
- 扱、天人のちさんせし玉のたいさへ、み仏をすへ奉り、ないちんのみ仏と、今此二仏をおかむにそ。少しもちかひまします。：(中略)：かくて、よしみつ、其名を、じかうとさため。ぜんくはうしとかうし。念仏けたいなく、仏法はんじやう、有かたし共中く申斗はなかりけり(『善光寺堂供養』)
- (8) 小林一郎氏『善光寺如来縁起―元禄五年版』(銀河書房) 解説参照。
 - (9) 阪口弘之先生「竹本義太夫―道頓堀興行界の戦略」(『國文學―解釈と教材の研究―』平成14年5月号) など参照。
 - (10) 拙稿「宇治加賀掾・山本角太夫」(『國文學―解釈と教材の研究―』平成14年5月号) 参照。

本稿中、原典引用部に穩当を欠く表現が見られるが、学術的处理として諒とせられたい。